

子どもの自立に向けた集団づくり
～甘えにならない支援の在り方～

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
126057 山本 友理

子どもの自立に向けた集団づくり ～甘えにならない支援の在り方～

山本 友理

生徒指導力高度化コース

要約：子どもが将来社会で生きていくためには、自分で必要最低限のことができなければならない。義務教育が終了すると、実社会に出て生きていく子どももあり、そのような子どもたちにとっては、自分に任された役割を担っていかなければならない。このような状況において、まわりの人に甘えても常に助けてくれるとは限らない。そのため、将来自分の力で生きていけるようにするには、小学校の段階で必要最低限の基礎・基本を身につけておくことが必要である。その必要最低限の基礎・基本を身につける際、自分でできることまでも人に頼って任せるというような「甘え」が出ると、自分から積極的に行動することができなくなる。また、それが習慣化されると自分の力で取り組むことができなくなる。子どもが自分の力で様々なことができ、将来活用できるようにするためにも、「甘え」にならないような支援が必要である。

キーワード：社会、自立、社会的生活習慣、自分自身、積極性、「甘え」

1. はじめに

子どもは関わりを通して関係づくりができてくると、教師に頼ってくるが多くなる。教職専門実習では、3年生と1年生に入らせていただいたが、筆者と子どもとの結びつきが強くなると、彼らは友達にまず頼るのではなく、筆者に頼ろうとする行動が多く見られた。特に1年生では、集団生活を送る上で最初の段階であるため、まわりの子どもたちの存在を意識しておらず、教師に様々な事を頼るということが多かった。本稿では、自分でできるにも関わらず他人に頼って任せようとする行動を「甘え」とする。この「甘え」が小学校の低学年段階から継続されると、子どもの中では当たり前の行動となる。そのような子どもが将来社会に出た場合、様々な困難をきたすと考えられる。

わが国においては、中学3年までで義務教育が終了する。義務教育が終了すると、実社会に出て生きていく子どももいる。子どもが社会に出たとき、まわりの人に甘えても、助けてもらえるとは限らない。そうなれば、社会に出ても、自分の役割を担えず、自分の力で生きていくことができなくなる。義務教育を終えた子どもが社会的な役割を担い、自分の力で生きていくことができるようにするためにも、小学校の低学年から必要最低限の基礎・基本を身につけていくことが大切である。

子どもが将来生活していく上で、必要な能力・態度・習慣などをまとめて西(1988)は社会的な生活習慣と述べている。その社会的な生活習慣は、所属する集団で縦の関係や横の関係を持つ中で形成される。子どもたちにとって、学校での集団生活を送る中でその力が形成されていく。社会的な生活習慣は基本的な生活習慣、意思の交換能力、集団への参加能力、自己指導力などに分けられ、小学校の1年生から形成していくことが大切である。その際、教師が子どもの要求を受け入れてしまったり、子どもの言動に対して寛大になってしまったりすると、自主性が育たなくなる。また、何もかも教師が手助けしてくれるといった誤った認識をもたせてしまう可能性もある。

子どもはまわりの子どもとの関係により様々なことを学び、身につけていく。いつか自分できようになるだろうという甘えを受け入れる姿勢では、いつまでたってもできないということがある。

家庭生活の中では、家族に対して甘えても、それが許されることがあり、わがままな行動をとったり、自分の思い通りにしたりしやすい。また、家族が手助けしてくれることも多い。その流れのまま、学校でも同じように子どもに対応すると、学校でもその習慣がついてしまい、教師が手をかさない必要最低限のこともできないということもある。子どもの将来という大きなビジョンをもって教育をすすめていくためにも、自立に向けた集団づくり、「甘え」にならない支援の在り方を考えていく必要がある。

2. 子どもの自立に必要な社会的な生活習慣とは

2-1 社会的な生活習慣形成の意義

子どもは成長し、発達していく中で自分が所属する社会を拡大していく。小学校に入学すると、習い事をしたり塾に通ったりする子どもも増える。放課後は学童で過ごす子どももいる。このように、家庭や学校だけでなく、様々な施設で過ごす子どもが多くなり、それによって所属する社会が多岐にわたって拡大されていく。

小学校生活が始まると、学級に所属するのみでなく、地域班や縦割り班など異学年の児童との交流する機会も多くなる。また、学年が進むにつれて、クラブ活動や委員会活動に参加することで、その所属する集団も多くなる。子どもたちが所属する集団が増えることにより、それぞれの集団生活に適応していかななくてはならない。その集団に適応していくためには、まわりの子どもたちや教師との関係づくり、集団の一員としての自覚や役割について考えていく必要がある。また、その集団生活における自己の課題を遂行し、自己の可能性についても見出していく必要がある。それには、それぞれの集団がもつ人格、物理的条件に親しみ、個性や能力を発揮できるようにしていくことが大切になってくる。

以上のように集団の中で子どもが適応し、生活していくために必要な力を西(1988)は社会的な生活習慣と述べている。この社会的な生活習慣は子どもが将来社会で生きていく上の基礎・基本となるものである。また、社会的な生活習慣だけでなく、子どもの将来への展望や、自尊感情、

実践力なども合わせて考えることで、子どもの社会生活を円滑に行う上での力を形成することができる。

2-2 社会的生活習慣の構造

子どもが社会で生活していく上で必要な力は、知的側面や情緒的側面に加えて、社会的適応の側面がある。この社会的適応の側面は社会的生活習慣を形成することで養われる。社会的生活習慣は、(a) 基本的生活習慣、(b) 意思の交換能力、(c) 集団への参加能力、(d) 自己指導力などに分けられる。集団生活における (a) 基本的生活習慣は、自分で自分の用意をする、自分が身のまわりの整理・整頓をするなど、自分で生活を送る上で必要な最低限のことができたり、習慣を身につけたりすることができることである。(b) 意思の交換能力においては、自分の思いや考えを伝えることができたり、他人の思いや考えを聞いて理解することができる力である。また、相手の立場を考えながら自分を表現する力など、相手との関わりやコミュニケーションをとる力も含まれる。(c) 集団への参加能力とは、うまくまわりとの人間関係を作り、集団生活に適応できる力のことを言う。(d) 自己指導力は、ルールやきまりをどれだけ守ることができるかや、規範意識をどの程度もって行動しているかなど、制限がある中で自主的に判断し、取り組むことができる力を言う。この 4 項目に加え、将来に夢や目標を持ち、前向きに生きようとする姿勢をあらわす将来への展望性や、自分に対してもつ誇りや自信などの自尊感情、積極的に行動し、物事を工夫してやり遂げる力の実践力を合わせもつことで、子どもが社会で生きていく上で必要最低限の力を身につけることができると考えられる。

3. 子どもの社会的生活習慣形成に関わる実態調査

3-1 調査の目的と方法

小学校段階での社会的生活習慣の形成において、子どもの実態を把握するとともに、子どもの発達段階に基づいた自立に向けての手立てや支援策を構築することを目的とし、A 小学校の協力のもと、アンケート調査を行った。アンケートについては、埼玉県立総合教育センターの研究報告書第 275 号「児童生徒の社会性の育成に関する調査研究」を参考に、(a) 基本的生活習慣、(b) 意思の交換能力、(c) 集団への参加能力、(d) 自己指導力、(e) 将来への展望、(f) 自尊感情、(g) 実践力、(h) 「甘え」に対する意識に項目分けし、それに基づく質問 25 項目をランダムに並べ、行った。アンケートの記入に関しては、4: できている (ある)、3: 少しできている (少しある)、2: あまりできていない (あまりない)、1: できていない (ない)、の 4 段階に分け、それぞれあてはまる番号に回答する形式で行った。

対象学年・人数は第 6 学年の 98 名、第 4 学年の 79 名、第 1 学年の 87 名で 12 月 12 日から 24 日までの期間に行い、それぞれの学年における平均値を集計した。

3-2 調査結果から見る子どもの実態

実際の調査から得た各学年の平均値をデータ化し、表とグラフを利用してまとめた結果を次に示し、各項目ごとに分析する。

表1 アンケート調査結果

項目名	質問番号・質問内容		1年	4年	6年
基本的生活習慣	5	朝、自分で起きていますか。	2.9	2.9	2.9
	9	忘れ物をしないようにしていますか。	3.5	3.2	3.1
	12	自分の用意は自分でできていますか。	3.8	3.8	3.7
	20	身のまわりの整理・整とんを自分でしていますか。	3.7	3.5	3.4
意思の交換能力	1	わからないときに友達に質問できていますか。	3.5	3.4	3.4
	6	自分が悪いことをしたらあやまることができていますか。	3.7	3.2	3.3
	17	友達の話を聞くことができていますか。	3.7	3.6	3.6
	19	困ったときに誰かに助けを求めることができていますか。	3.6	3.3	3.1
集団への参加能力	3	友達と仲よく遊ぶことができていますか。	3.7	3.7	3.7
	7	友達といっしょに作業することができますか。	3.6	3.8	3.6
	8	友達との約束を守ることができていますか。	3.6	3.7	3.6
	13	自分の思いどおりにならなくてもがまんすることができていますか。	3.5	3.4	3.1
自己指導力	4	チャイムがなったら自分の席につくことができていますか。	3.4	3.3	3.3
	14	必要でないものは学校にもってきていませんか。	3.9	3.9	3.6
	18	学校のきまりを守ることができていますか。	3.8	3.2	3.0
将来への展望	2	大人になったら何になりたいか考えていますか。	3.4	3.5	3.2
	11	自分の目標に向かって努力していますか。	3.6	3.5	3.2
自尊感情	21	人の役に立っていると思いますか。	3.3	2.5	2.7
	23	やれば何でもできると思いますか。	3.7	3.0	3.0
	25	自信をもってできることがありますか。	3.9	3.6	3.3
実践力	15	手伝いや仕事を自分からすすんですることができていますか。	3.6	2.9	3.0
	16	忘れ物や落し物を見つけたら人にとどけることができていますか。	3.7	3.2	3.0
甘えに対する意識	10	自分でできることも人にしてもらったことがありますか。	2.0	2.5	2.9
	22	友達にたよることが多いですか。	2.3	2.3	2.8
	24	先生にたよることが多いですか。	2.3	2.2	2.5

(a) 基本的な生活習慣について

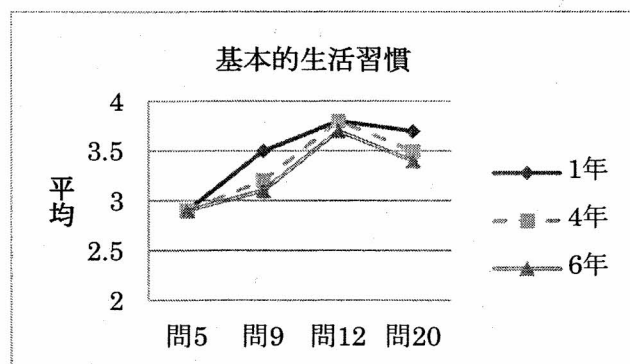


図1 基本的な生活習慣

基本的な生活習慣においては、全体的に朝自分で起きている子どもの割合が低かった。これは、自分で起きることができなくても、誰かが起こしてくれるといった安心感や甘えから、自分で起きなくても大丈夫であろうという子どもの意識につながっているように捉えられる。他の項目に関しては、第1学年の方が全体的に割合が高く、学年が上がるにつれて割合が低くなっていた。

第1学年は学校生活における最初の段階であるため、厳しく指導されていることがあり、それが習慣に結びついているのではないかと考えられる。一方、学年が上がるにつれて、だんだんと子どもも自分でできることが増え、生活指導も低学年に比べると徹底されなくなり、子どもの意識も低くなると考えられる。また、学年が上がるにつれて友人関係も深まってくるため、自分ができなくてもまわりが助けてくれる、誰かがしてくれるといったまわりに頼る傾向が高まってくることも考えられる。

(b) 意思の交換能力について

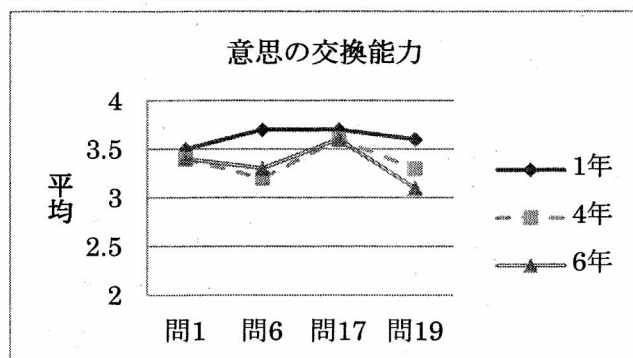


図2 意思の交換能力

意思の交換能力においては、問6と問19に差が表れている。これについても、学年が上がるにつれて自分の感情や思いを表現するのが恥ずかしい、伝えなくてもある程度相手が理解をしてくれるといった自分の中での判断や気持ちが行動よりも先に表れていることが関係していると思われる。また、自分が困っていた時に誰かが助けてくれるというようなどこかで他人を頼りにする、他

人の行動を期待することにより、自分から積極的に働きかけることが少なくなっているのではないかと考えられる。高学年になるほど、自分の気持ちを相手に伝えることに抵抗を感じたり、自我が強くなることで自分の非を素直に認めることができなかつたりすることが多くなるため、このような結果につながったと考えられる。

(c) 集団への参加能力について

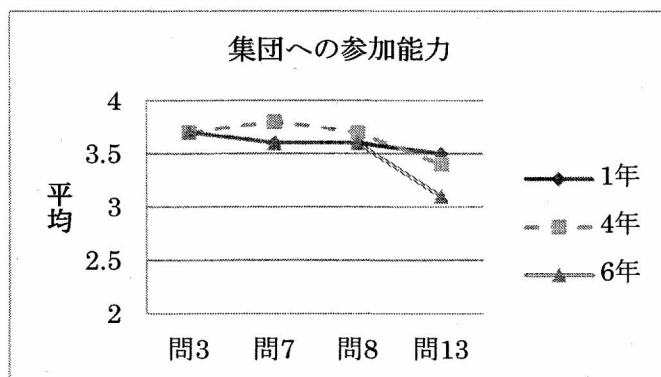


図3 集団への参加能力

この項目においては、問13に変化がみられた。「自分の思いどおりにならずとも我慢することができているか」という内容であるが、第1学年の方が一番割合が高いという結果になった。第1学年の場合、気持ちをストレートに表現する傾向にあるため、割合が低くなるとは思われたが、第6学年の方が低かった。これは、発達段階が上がるにつれて自我が形成さ

れ、自己主張も強くなることに関係していると思われる。自分のこだわりや主張が強くなると、意見がぶつかりお互い譲らないということがあるので、このような結果になったと考えられる。また、第1学年では、自分の意見ばかりを重視するのではなく、相手の意見を聞いてから自分の意見を伝えるという指導を徹底されていたこともあり、割合が高くなる結果につながっていると考えられる。

(d) 自己指導力について

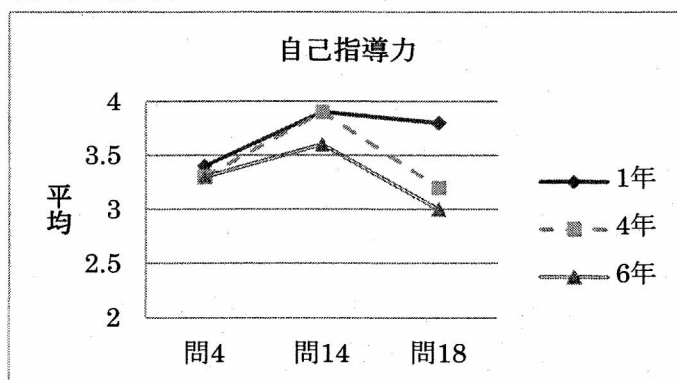


図4 自己指導力

この項目については、制限やきまりがある中で自分がどれだけ意識して行動できているのかを調査したものである。この項目においても、学年が上がるにつれて割合が低く、規範意識が第1学年に比べて低いと思われる。チャイムが鳴ると席に着くことや学校のきまりを守るということは、主に低学年で厳しく指導され、子どもたちの間ではだんだんと当

たり前の行動になり、習慣となる。そのため、学年が上がるごとに、指導も細かくされなくなるため、改めて子どもたちが規範を常に意識して行動することが少なくなるとは思われる。また、子どもは教師の反応を伺い、どの程度までなら厳しく指導されないのか判断し、行動していることも結果につながっていると考えられる。誰かが見ていなければ多少守ることができなくても大丈夫であろうという気持ちの甘さも関係しているのではないかとと思われる。

(e) 将来への展望について

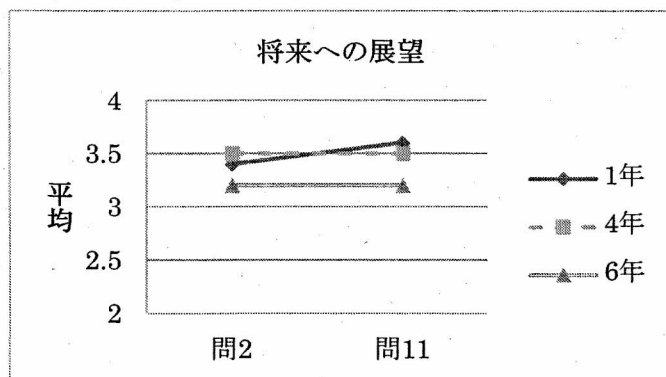


図5 将来への展望

将来への展望については、第6学年の割合が低かった。これは、だんだんと様々な職業を知る中で夢が現実味をおび、自分にあった職業や自分に向いていそうな職業を考えるようになるからであると思われる。また、小学校の段階ではすぐに就職というわけではなく、中学校に進学するため、今すぐに考えなくてもよいという思いがあるのかもしれない。子どもたち

の中では、小学校を卒業してからは中学校・高等学校・大学というように進学イメージが強いいため、第6学年でも将来に対する展望が少ないのだと考えられる。中学校を卒業してから社会に出て働くという実感がまだもてないこともあり、このような結果になったとも考えられる。

(f) 自尊感情について

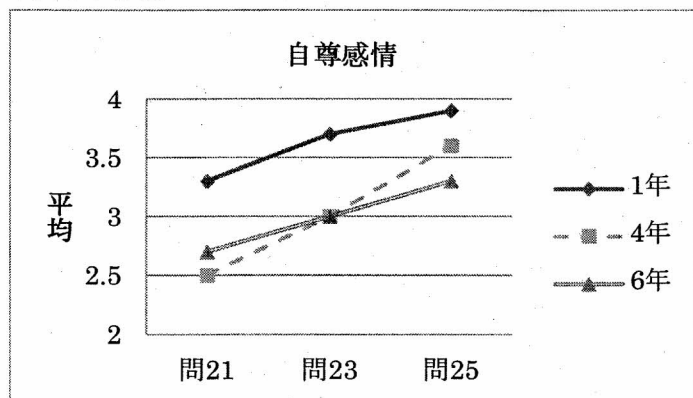


図6 自尊感情

自尊感情についても第6学年の割合が低いという結果になった。各学年ごとに差が表れたのは、「自分に自信をもってできることがあるのか」という質問である。やはり第6学年になると、自分の得意・不得意がはっきりし、得意であつてもまわりの子どもと比較して考えるので、自信があるとはっきり言えない場合が考えられる。なか

なか自信を持って行動することができなかつたりすると、それが誰かのために何かをするという行動に踏み込みにくくなると捉えられる。そのため、「人の役に立っていると思うか」という質問についても第1学年より他の2学年は割合が少なくなっているように考えられる。

(g) 実践力について

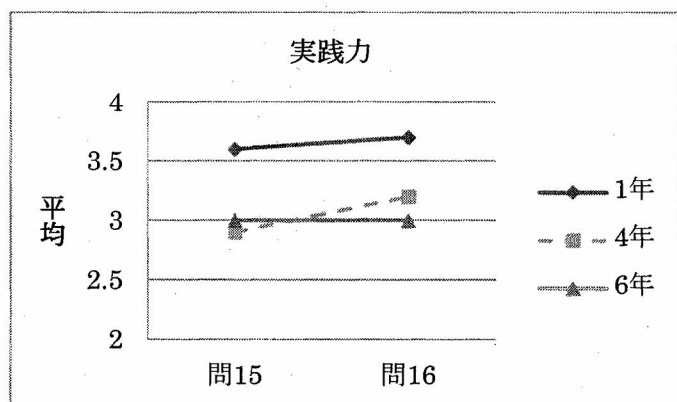


図7 実践力

実践力については、「物事に対して自分から積極的に行動できるかどうか」を調査した。「落とし物に気づいたときに人に届けられるか」ということや、「手伝いを自分からすすんですることができか」を質問項目に取り上げ、行った。第1学年においては、自分から何でもしたいというように意欲的に行動してるが、学年が上がると誰かがしてくれる、自分が動かなくても大丈夫

というように、他人を頼りにしていることが考えられる。また、自分でしないといけないという意識はあるが、行動に移すとなるとまわりの状況を気にしたりして、なかなか移せなかったりすることもある。日頃から、何事にも自分から積極的に行動することを心がけていないと難しいと考えられる。

3-3 アンケート調査結果から見るこれからの課題と展望

アンケート調査を行った結果、すべての項目において第1学年のほうが平均値が高く、自分でできていると感じている子どもが多かった。そのため、回答においても4と答える子どもが多かった。一方で、第4学年や第6学年の子どもは何か足りない、どちらかといえばできていないと感じている子どもが多く、3や2と回答する子どもが多かった。

第1学年は入学当初から細かく生活指導を丁寧に行うが、だんだん子どもが成長するにつれて繰り返し行わなくても基礎・基本ができるようになるため、子どもも意識して行動しなくなる。低学年においては、繰り返しこまめに指導が入るので子どもも意識して行動しているように思われる。学年が上がると子どもは言わなくてもできるであろう、できるようになるであろうというイメージもあるため、低学年に比べると細かく指導しないことがある。また、子どもも高学年になるほど、自分はできている、分かっていると思うため、指導が入っても聞く耳をもたなかったり、その場限りで分かった気になったりする。しかし、今回の調査結果から改めて考えると、自分が思っているよりもできていない、足りないと感じている子どもが多数いた。この結果から、改めて普段の行動について見つめ直し、考える機会を設けることで、子どもも自覚するようになると思う。これを何度も繰り返すことで、子どもが意識して行動することにつながると思われる。

この調査により、積極的に行動することや自分からすすんで何かしようとする子どもの割合も

学年が上がるにつれて少ない傾向にあった。また、自信をもってできることがあると言える子どもも高学年ほど少なくなっていた。子どもの将来を考えると、自分で動かないと進まない場面が多く出てくるため、早い段階から積極性を身につけることが大切である。自信がないから思ったとおりに行動できなかったり、不安を感じているから控えめになっていたりすることも積極的な行動がとれないことにつながっていると思う。さらに、まわりの子どものことを気にしたり、比較したりすることで、自信がなくなったり、積極性が低くなったりしているとも考えられる。そのため、子どもが自信をもって取り組めるような声かけや働きかけを行い、一つでも自信があると言えるようなことを増やしていけるように可能性を見出していくことが必要である。また、子どもが積極的に行動した場合に評価したり、褒めたりして、子どもにとってもメリットがあるように工夫していく働きかけが必要であると思われる。まわりの子どもとの関係づくりにおいても、一人ひとりの良さが出るような環境をつくれるように取り組んでいくことで、子どもたち同士が互いの良さを共有し、学び、高めていくことができると思われる。

アンケート調査全体を通して、子ども同士の関係づくりや集団づくりができていたことがわかった。その一方で高学年になるにつれて、自分からというより、誰かが何とかしてくれるのではないかと他人を頼りにしている面も見受けられた。自分ができないことや、困ったときは他人を頼りにすることがあるが、自分でできることまでも頼りにするとそれが習慣となり、当たり前の行動となる。子どもが将来社会に出たときにまわりの人に頼ってばかりで生活できるとは限らない。そのため、自分の力でできることは自分でする習慣をつけるように学校生活の中で養っていく必要がある。

4. 子どもにおける「甘え」の実態

4-1 子どもにおける「甘え」とは

「甘え」と一言で述べても様々な意味があるが、ここでの「甘え」を「自分でできるにも関わらず他人に頼って任せようとする」行動のこととする。このような行動は、子どもたちが学校生活を送る中で出てくるものである。自分の気分や気持ちの甘さからできることまでも、他人に頼って任せたままになったり、できないわけではないが苦手というだけで、他人にしてもらったりすることが子ども同士の関係の中でも表れている。しかし、このような行動においては、小学校生活でまわりに親しい友人や知っている仲間がいれば問題ないが、誰も親しい人がいない、知っている人がいないという状況の中では通用しない。子どもたちは社会に出ると様々な人と出会い、仕事をしたり活躍したりする。そのような状況の中では、常に自分のことを知ってくれている人が身近にいるというわけではない。自分に任されたことも他人を頼りにし、任せてしまうと他人への迷惑もかかる。さらに、自分自身も今までとは違った現実が突きつけられるため、社会で生きていくことが難しくなる場合もある。自分が今まで通用してきたことが通用しなくなると、社

会に出ることを躊躇したり、抵抗を感じたりすることもある。このような、社会に出ることに対して前向きになることができない場合、自立も難しくなる。子どもたち自身が、社会に出て活躍し、これからの社会を担っていけるようにするためにも、小学校段階から自立に向けての一方法として「甘え」にならないような支援策を考えていくことが必要である。

4-2 「甘え」にならない支援とは

今回行ったアンケート調査内で、子どもがもつ「甘え」に対する意識について質問を3項目設け、行った。その結果を次に示し、分析していく。

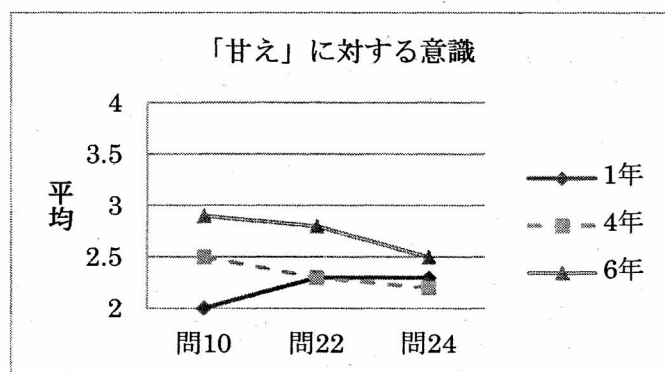


図8 「甘え」に対する意識

「甘え」に対する意識の調査においては、問10と問22に大きな変化がみられた。

問10において、自分でできることも人にしてもらったことがあると答える子どもの割合が学年が上がるにつれて多くなっていた。学年が上がる、お互いの性格や内面など理解が深まり、友達に頼ることが多くなると思われる。また、高学年ほど、友達関係や友達の反応を気

にしたりするので、頼りにされるとはっきりと自分の気持ちを伝えることができない場合が考えられる。その結果、頼まれたことに対して断ることができない可能性がある。そして、人の分までしなければならないということが生じてくる。このような場合、頼りにした子ども自身、他人に任せの方が自分でするよりも、負担が少ないと感じてしまうことがある。このような気持ちの甘さが生じると、繰り返し誰かに頼るようになり、それが否定されない限り続いていく。子どもの中で誰かを頼るという行為が習慣化されるとなかなか自分では気づかないことがある。アンケート結果において、問22と問24を比較しても、教師に頼ることよりも、友達に頼ることが多いと回答する子どもが多かった。このように、自分では気がつかないうちに友達に頼ってしまうことが多い子どもがいると思われる。

第1学年については、自分でできることは自分でしなければならないという指導を繰り返されているため、自分が困ったり分からなかったりする場合以外は人に頼ることが少ないように思われる。しかし、その中でも少しの子どもは友達に頼ることが多いと回答している。第1学年のような小学校生活の最初の段階でも誰かに頼ることがあるという現状を踏まえ、低学年・中学年・高学年と子どもの成長に合わせて、自分でできることは自分でさせるように支援していく必要がある。

5. 考察

小学校における子どもの自立に関して必要であると思われる力についてアンケート調査から、質問項目に「自分で何かをする」という内容が入っていると平均値が低いという特徴が第1学年、第4学年、第6学年とも共通していた。子どもは、まわりに頼れる存在の人がいると、自分でできる、できないに関わらず頼りにしていると考えられる。このことは、子どもたちが積極的に行うという気持ちが低く、誰かが助けてくれるという気持ちがあり、他人に期待している。友達に頼ることが多いと回答した子どもの多くが教師にも頼ることが多いと回答している。この結果から、子どもは自分が頼れると感じた場合、すぐに誰かに頼っているのではないかと考えられる。子どもは習慣やその場の状況で行動することが多く、常に将来という大きな見通しを持って行動しているわけではない。そのため、人に頼ろうとしたときに本当にできないことなのかを考えさせる必要がある。

低学年においては、自分でできたことに対して褒めるなど、子どもが自信をもって行えるような工夫をすることが大切である。また、自ら積極的に行動できた場合にクラス全体の前で褒めるなど、学級集団を意識した働きかけが大切になる。低学年の場合、友達に頼りにされると積極的に手伝おうとする子どもが多いが、教師は安易に手伝いをさせるのではなく、その相手の子どもができることまで手伝わさないようなきめ細かな指導が必要である。

中学年においては、低学年に比べると自分でできることも増えてくる。しかし、積極的に自分から行動できている割合が低い。子どもたちの中で、まわりに誰かがいるから大丈夫であろうという安心感があることが考えられる。第4学年に関しては、年度が変わると高学年になる。高学年になると自分でできなければならないことがさらに求められる。そこで、できない場合、子どもの自尊感情は低くなることが考えられる。自尊感情が低くなると、できることも自信をもってできないことがある。そのため、自分の行動や生活を振り返る機会を設け、自分の行動や生活を意識させることが大切となる。

高学年においては、将来をまず意識させることが大切である。中学校を卒業して社会に出る子どもがいるという現実を伝え、社会で生きていくために必要な力は何か考えさせることが必要である。その際、自分の力で生きていくためには、常に誰かを頼りにしてばかりではいけないということを自覚させることが必要となる。自分の将来について、考えさせ、行動や生活を振り返ることで、子どもの意識も変わると思われる。

以上のことから、子どもが自分で自覚していないことや気づいていないこと、当たり前に行っている行動などを振り返り、見つめる機会をつくることで、子どもはだんだん自覚することができるようになる。また、その機会が少ない場合、子どもの意識も薄くなるので、こまめにつくる必要がある。学年や発達段階に合わせた支援を行うことで、子どもが必要なこと以外誰かに頼る回数が少なくなり、「甘え」が減ると考えられる。このように、「甘え」が減ると、将来子どもは社会に

出た時に活躍することができ、自立につながると考えられる。

6. おわりに

アンケートを通して、子どもは友達と一緒に作業をしたり、遊んだりすることができている割合が全体的に高かった。その一方で、自分で何かをする、自分から積極的に行動するという割合が低かった。そのため、学校生活においては、集団の中でも自分のことは自分ですということ意識させることで、クラス全体としてもお互いが意識し合えるようになると思われる。お互いが意識することで、子ども同士の声かけや、働きかけが生まれると思われる。また、自分では気づかなくてもまわりの子どもが気づくこともある。自分が誰かにできることも頼ったとき、相手が声かけを行うことで、自覚することができる。この繰り返しのよって子どもは少しずつ成長し、できるようになる。そうすることで、すぐに「誰か」にではなく、まず「自分で」というような行動がとれるようになると考えられる。この習慣が身につくことで、「甘え」にならず、自分で取り組むことができるようになる。自分で積極的に行動ができると社会に出た場合、自分の役割を担い、生きていくことができる。

引用文献・参考文献

- 1) 折出健二(2008)『生活指導』学文社
- 2) 埼玉県立総合教育センター(2001)「児童生徒の社会性の育成に関する調査研究の概要」
www.center.spec.ed.jp/d/b/db14.pdf
- 3) 西君子(1988)『子どもの自立② 社会的生活習慣のしつけ』明治図書
- 4) 津村俊充(2002)『子どもの対人関係能力を育てる』教育開発研究所
- 5) 深谷昌志(2002)『子どもの規範意識を育てる』教育開発研究所
- 6) 松田文子・高橋超(2002)『生きる力が育つ生徒指導と進路指導』北大路書房
- 7) 宮下一博・河野莊子(2005)『生きる力を育む生徒指導』北樹出版